

そつ たく 啖啄

令和3年12月1日発行 No.19

編集・発行 大島町教育委員会

教育文化課事務局

TEL04992-2-1453

題字「井島 吉春」

「生きる力」

教育長 谷口 浄

2020年3月新学習指導要領「生きる力」が文部科学省より公示されました。学校で学んだことが、明日、そして将来につながるように子どもの学びが進化するといえます。「生きる力」をはぐくむということは、以前より学習指導要領の基本理念とされていました。

新学習指導要領では、「いきる力」の理念の実現のためにこれまでの学校現場での課題を踏まえ、指導面などで具体的な手立てを確立することを目指しています。

改訂された学習指導要領は、人工知能の普及やインターネットの生活への浸透により、社会や生活が大きく変わると予想される時代に変化を前向きに受け止め、人生を豊かにしていくためにどうすべきか主体的に考え出すことができる力が「生きる力」です。これからの社会がどんなに変化して予測困難になっても自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、判断して行動し、それぞれに思い描く幸せを実現して欲しい。そして明るい未来を、ともに創っていきたい。そうした願いが2020年度から始まった新学習指導要領にはこめられています。基礎的、基本的な知識、技能を確実に定着させることとこれを活用する力をしっかりとほぐくんでいくことのどちらも重視しています。また、「生きる力」をはぐくむ理念を実現するためには、教師が子どもたちと向き合う時間を確保することが必要です。

○文部科学省が定義する「生きる力」とは？

新学習指導要領では、生きる力を「知・徳・体のバランスのとれた力のこと」と表現しています。

① 知＝確かな学力 基礎、基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力 ② 徳＝豊かな人間性 自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性 ③ 体＝健康・体力 たくましく生きるために健康で過ごすことや体力をつけることなど。また、文部科学省は「生きる力」を身につけるため3つの柱「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」をあげています。

1.知識及び技能

基礎的・基本的な知識を学びながら、社会におけるさまざまな場面で活用できることを目指しています。身に付けた技能を自分の経験などと関連づけ、いろいろな場面で活用していこうとすることで習熟した技能となっていきます。

2.思考力、判断力、表現力

問題の解決方法を考える時にはまず結果を予測し、次の問題発見・解決につなげていきます。そして、自分の考えをもち、文章で表現したり、お互いの考えを伝え合ったりして、グループでの考えをまとめます。

3.学びに向かう人間性等

主体的に学習に取り組み、感情をコントロールして、客観的にとらえる力は大切です。また、他人を尊重し、互いのよさを生かして協働する力、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりがあることは重要な要素となります。

○なぜ「生きる力」の育成が必要なのか？

これからは新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として重要性を増す「知識基盤社会」の時代です。知識基盤社会においては、「課題を見出し解決する力」「知識・技能の更新のための生涯にわたる学習」「他者や社会、自然や環境と共に生きること」などの変化に対応するための能力が求められます。このような時代を担う子どもたちに必要な能力こそ「生きる力」といえます。国際的に共通する現代人の主要な能力のうち個人の成功と社会の発展にとって価値があり、さまざまな状況における複雑な課題に 대응することができる能力のことを定義しています。これまでの国内外の学力調査などから、これまでのやり方では不十分であることがわかっています。具体的には思考力・判断力・表現力を問う読解力や記述式問題、知識、技能を活用する問題に課題が多く見つかりました。また、家庭での学習時間、学習意欲、学習習慣・生活習慣の違いにより読解力や成績の差が広がりました。さらに自分への自信のなさや将来への不安、体力の低下なども見られました。

○学校教育がどう変わる？（新たな教育内容を見ていきましょう。）

①言語活動の充実

国語の学習の中で、論理的な考え方やコミュニケーション能力、豊かな感性を育むことを重視していきます。

②理数教育の充実

繰り返し学習や、表現力を磨くための観察・実験、レポートの作成をどんどん行っていきます。国際人として通用するように意識しており、この中には2020年度に小学校でプログラミング教育も入ります。

③伝統や文化に関する教育の充実

郷土の伝統や文化を受け止めて国際社会で活躍することを目標とします。武道の指導もこれにあたります。

④道徳教育の充実

基本的な生活習慣を身に付けさせ、自分への信頼感や思いやりの心を育てていきます。法やルールについても理解し、主体的に判断し、適切に行動できるよう、年齢に応じた教材や体験活動を充実させ、家庭や地域との役割分担をしていきます。

⑤体験活動の充実

子どもたちの社会性や豊かな人間性を育むため、宿泊学習(小学校)、職場体験(中学校)、奉仕体験や就業体験(高等学校)を重点的に行っていきます。

⑥小学校段階における外国語活動

英語の音声や基本的な表現に慣れ親しみ、親しみながら言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図れるようにし、中学校へのスムーズな接続を図ります。

予測困難な未来を担う子どもたちに向けての新学習指導要領はとても奥深いものとなっています。これまで日本の学校教育が外国と比べて劣ると考えられていた分野を中心にどんどん教育内容が強化されていきます。保護者も学校と手を携えて、子どもたちのやる気や自信を引き出してあたたかく見守り、「生きる力」の育成をしっかりと支えていきましょう。

2021.9.2 みらい(子どもの未来を切りひらくメディア)より抜粋

人がどのように生きていくかは、過去、現在、未来を一人ひとりが生涯を通して創造していくことにある。また、人道にはずれることは別にして、何をしているから良いとか悪いとかは人の価値観皆それぞれです。しかし、自分の思い描く、「成りたい者に成る」ことは容易なことではありません。子どもたちにはそのことを早く気づいて、努力を積み重ねていくことが、自分の人生を豊かに生き抜いていく、「生きる力」を力強くもってほしいと願っています(そのために大人は何をすべきか、何ができるか)。

脳を生かす勉強法

教育長職務代理 山田 三正

上の題名は脳科学者の茂木健一郎先生の著作本(2017)の題名です。先日講演会で児童生徒のやる気スイッチをいれるにはというお話を聞き、脳科学と勉強の話を思い出しました。

勉強の方法をまずは脳を知って、脳科学から方法を考えて実行してみましょ。

著作を読まれている方もいると思いますが、まずは簡単に内容紹介をさせていただきます。

「脳を活かす勉強法」とは、脳の特性を知り、自分の脳と上手につきあうことで、学習そのものを楽しめるようになる“学びの習慣”のこと。この脳を生かすという勉強法の本質は「どのようにして自分の脳を喜ばせるか」だといえる。では、どのように勉強すれば、脳が喜ぶのか。

脳を喜ばす3つのしくみ。

①「ドーパミン」による「強化学習」によって、脳を強化する。

〈ドーパミンとは色々な調節に関わり、快感、意欲や学習などをも高揚させる物質〉

〈強化学習の(雑ですが)広い意味：試行錯誤により色々な事をやり、喜び・報酬を受けてさらに学習すること〉

②「時間を区切り意識し、動く」で脳の持続力を鍛える。

③「集中力」を徹底的に身につける。

こうすれば脳が喜ぶ勉強法になる。

この3つを踏まえつつ、脳のメカニズムについて。そして脳を活かす勉強法とは。

○脳は、何かを達成するたびにどんどん強くなる

一生懸命考えていた問題が解け、「やった！」(達成感)と喜ぶ。この時、脳の中では「快感」を生み出す脳内物質、「ドーパミン」が分泌されている。

○脳はドーパミンが分泌された時、どんな行動をとったかを記憶し、ことあるごとにその快感を再現しようとする。そして、効率的にドーパミンを分泌させるため、脳内では新しい神経回路網(シナプス)が生まれる。そのため、快感を生み出す行動が癖になり、何度も繰り返すたびに、その行動が上達する。これが「学習」のメカニズムだ。

○特に、試行錯誤を経ることで脳内に強固な神経回路網が形成され、やがて1つの行動に練達していく。これを「強化学習」という。

◎脳を活かす勉強法の1つ目の極意は、この強化学習のサイクルを回すこと。

大切なのは、ドーパミンによる強化サイクルが回るかどうか。この回路さえ回り始めれば、あとは簡単。雪玉が転がるうちに大きくなるように、特に手を加えなくても、脳は強化されていく。

◎脳の働きの本質は「自発性」だ。やる気は、好きなこと、ほめられた経験など、ポジティブなものからしか生まれない。何をするにせよ「自分が選んでいる」という感覚が強化学習に欠かせない。

「喜び」がないと強化回路が回らない。「勉強しなくちゃだめでしょ」。親や先生にこう言われて勉強している子どもに、ドーパミンによる回路の強化は期待できない。仕方なく、嫌々勉強しているだけだからだ。

以上は脳の側の学習理論です。これをもとに勉強する側のことを考えます。

まず勉強するために集中力を鍛えます。勉強する時はいきなりトップスピードでやる。そしてすこし雑音のあるところで集中する。タイムプレッシャー(時間制限)をかけて、学習習慣の中に自分を入れることです。そして能力を最大限高めるために、新しいことへの挑戦をしましょう。それによりドーパミンが分泌され強化学習が起こります。強化学習にとって大切なことはゲーム(ゲームは楽しい)のような体験感覚を勉強に活用するのも手です。

生の体験は記憶整理が行われるので大切です。勉強しようという人は自分が望むように、脳を変えることができます。意欲する方向に脳は進化します。目標に挑戦し続ける意欲をもつことで人間の脳は成長します。どんどん新しいことに挑戦しましょう。ちなみに、脳科学では頭の良い人とは、他の人と心を通して意見を聞き、自分の意見をしっかり決めて上手にやっていける人の事をいうそうです。勉強の内容・深さそして指導などは又の機会に。

*ゲーム：ゲームの最も原始的な形は「目標」「決まり」「得るもの」「自発的受容（以上の3つの要素を強制されず自ら受け入れること）」の4つであり、「挑戦・試行的側面」「情意的側面」「社会的・協働的側面」の3つの見方も考えられます。そしてゲームが「楽しいもの」であるための要素は「刺激」「空想」「物語性」「挑戦」「連帯感」「発見」「表現」「気晴らし」です。

「ケガから学ぶ」

委員 井島 吉春

調子に乗って字を書きまくっていたら腱鞘炎になってしまった。正確には、またなってしまったと言った方が良い。20年ほど前から、最初は手首、その次は中指、薬指と痛みが出るたびにステロイド注射を打ち、なんとなく治って今日まで来たが、今回の小指は注射を打っても全く痛みは引かず、夜寝ていても痛みで起きてしまうほど酷くなってしまった。

医師からは簡単な手術なので切った方が良いと勧められ、それではということで手術をすることになった。術前に諸々の検査をして色々な説明も受け、何枚かの誓約書に痛みを堪えながらサインをしていよいよ手術となった。生まれてこの方メスを入れられたことなど一度もなかったのに、手術台に横になった時はそれなりに緊張し、医師団が手術室に入ってきた時は本当に治るのか、切るのが正しかったかなど葛藤があった。結局観念し平常心を保つよう自分に言い聞かせた。と、その時助手の医師から「すみません、こちらの誓約書にもサインをお願いします。これは体がベッドから落ちないようにベルトで固定することに同意していただくためのものです。」と言われ、なに、そんなに暴れるほど痛い手術なのかと複雑な心境の中サインをした。手が痛いというのにどこまでも自筆のサインが必要な社会なのだなあと、手書きの重要さを改めて感じた。

手術は無事終了し、包帯でぐるぐる巻きにされた手を見た時は、なんでこんなことになってしまったのだろうと落ち込んだ。抜糸まで2週間くらいかかるとのことで、その日から不自由な生活が始まった。食事やその他、日常普通にしていたことができない。痛み止めや抗生物質など一定期間飲み抜糸となったが、今度は手をしっかり握ることができなくなり、現在もリハビリ中である。

私は仕事柄毎日筆を持つが、今までのような持ち方ができなくなった。やや専門的な話になってしまうが、私の好みの書風(字の雰囲気など)は中国北魏時代の龍門様式でかなり力強い楷書である。筆の持ち方は強くしっかり持ちグイグイ切り込んでいくスタイルである。しかし、これからは持ち方を変えなければならない。そうしないと私の書は消えてしまう。この際柔らかく持って書くスタイルに変更し、書風も情緒あるものへ変えようかと一瞬思ったがやめた。頭の中には学生時代から惚れ込んでいたこの強い書風がこびりついており、なんとか工夫して返り咲こうと決心し、リハビリしながら格闘中である。

島外の書道仲間に腱鞘炎についていくつか聞いてみたが、やはり職業病のような感じで少なからずいる。どのように対処しているか聞くと手術をした人、温存療法の人、手を休めながら無理な書き方をしない人などいろいろいたが、自分の作品づくり以外の筆耕などの頼まれ事は一切引き受けられないという人もいた。スポーツ選手だって故障の無いよう体のメンテナンスを怠らないのが一流選手だというし、書道も一緒だと深く反省した。

冒頭で調子に乗って書きまくったと書いたが、この調子に乗るという姿勢が悪であり、書きまく

るという事は、なんの心も込めて書いていないという事である。無心で書いているとは全く次元が違う。書道の心を忘れてしまった結果がこの始末だったのだ。慣れとは恐ろしいものだ。これからは、無理はせず初心に戻りゆったりした心で書に向かっていきたいと思う。

今回の出来事で何不自由なく動かすことのできる体がどれだけありがたいものなのか、自分の体は自分で守るしかないことを切に感じた。人間生きているうちは学ぶことがつきないものだとつくづく思った。

大谷翔平選手

委員 山本 忠夫

日本人がアメリカのメジャーリーグで最後までホームラン王に挑む。そんな信じられない活躍を大谷翔平選手はしてくれました。ピッチャーという仕事もして、登板しない日は野手としても仕事をして、どれだけタフなのか。本当にすごい！コロナで塞ぎがちな気持ちを毎日ワクワクする気持ちに変えてくれました。

ある記事を読むと…

大谷選手は今でもそのイメージは野球少年のまま。野球をやっていないときは、何をするのが好き？ と聞くと、彼は少し考えてからこう答えた。「トレーニングかな」と。

また、「外に飲みに行ったり、食事に行くこともほとんどない。彼が望むのはトレーニングする場所が近い、それだけです。」と。

きっと小さい頃「そんなことやっていないで…〇〇しなさい」と言われたと思います。でもそれを気にしないで没頭することが出来たのですね。

それを思った時、さかなクン（東京海洋大学名誉博士・客員准教授）のお母さんの言葉を思い出しました。

さかなクンは、小学2年のとき、タコの絵を見て夢中になり、考えるのはタコのことばかり。小学校では、授業についていけず、担任の先生から「絵はすばらしいけれど、勉強もするようにしてください」と、注意された時に…

「あの子は魚と絵が好きだからそれでいいんです」とお母様は言い、将来本人が困ると言われても、「成績が優秀な子もそうでない子もいていい。みんな一緒ならロボットになっちゃいます」と答えたそうです。その言葉にさかなクンは、「失敗しても大丈夫だ」と救われたと言います。

教育の目標は「自立」させることと言われます。それは知識を教えることも当然含まれていますが、大人の言う通りにさせる…ということよりも、自分で考える機会を提供し、自分の道を自分で

見つけ勇気をもって歩めるように援助する。口で言うのは簡単だけど、

どこまで教え、どこから自分でやらせるか…、

正解がない中で答えを探すようなもの。かなり難しい…。

最後に
大谷翔平選手が高校時代の恩師、佐々木洋監督にかけられた言葉

「先入観は可能を不可能にする」

私は、先入観なく夢を語ってあげられているだろうか…。ああ、やっぱり難しい…。

「ブルービー」

委員 宮本 里香

今年も、海や畑や家などで、ギョッとしたり「キャー」「ワー」など、驚きや悲鳴を上げた人は多かったのではないのでしょうか。自然と共存しているのだから仕方ありませんが、私もクモやムカデ、蛇や蜂などに悪戦苦闘しました。海では今まで生息していなかった猛毒をもつヒョウモンダコが数年前からいると聞きますし、沖縄の県魚として親しまれているグルクン（タカサゴ）が今年はたくさん釣れるようになりました。本来この地域に生息していなかった生物がいるということに、危機感を持ち、考えさせられているときに、嬉しい記事を目にしました。第2480号の東京七島新聞で、「ブルービー」と呼ばれている幸せを呼ぶ青い蜂「ルリモンハナバチ」が秋の浜付近の歩道にある花壇で発見されたと写真付きで載っていました。生息地は本州～九州に分布し、絶滅危惧や準絶滅危惧種に分類している県もあり、数が少なく、なかなか発見できないため、見つけることができれば幸せになれると言われているようで、観光客が発見しカメラに収めたと書いてありました。ケブカハナバチ、スジハナバチの巣に侵入して卵を産み、幼虫になるとそれらの蜂の成虫が集めてきた食べ物を食べて大きくなっていくそうです。蜂を見ては逃げ回っていたのに、幸せを呼ぶ青い蜂と知っただけで、愛おしく感じるのだから、身勝手なものです。

都内ではコロナ渦でなかなか外に出られないという人が多い中、幸いにして、大島は、自然を満喫することができます。近くの用事も、つつい車を利用してしまいますが、この機会に、歩いて島内を散策し、草花や虫など自然に目をむけてみると、新たな気付きや発見があり、日々の生活が豊かになるかもしれません。来年も庭に花を植えて「ブルービー」が訪花してくれるのを願い、楽しみに待ちたいと思います。

【大島町教育相談室のご案内】

大島町教育相談室は、教育相談員・指導員・スクールソーシャルワーカーの5名体制で、子ども達や保護者、教職員のための相談対応、支援を行っています。

教育相談事業

不登校・いじめ・発達の違い・学業不振・非行など、子ども（小・中学生）のあらゆる教育相談について、本人や保護者及び学校関係者のご相談をお受けします。

適応指導教室「パレット」

さまざまな理由で学校に行きにくかったり、登校できないでいる小・中学生のための居場所です。一人一人に応じた体験活動や学習活動を行い、学校復帰や社会的適応（自立）にむけて支援をしていきます。

困ったり、悩んでしまった時は、迷わず（2-4544へ）直通電話へ連絡ください

【連絡先】大島町元町字丸塚 548 番 1 大島町生涯学習センター・郷内（2階）

電話：2-4544 メールアドレス：kyouikusoudan@citrus.ocn.ne.jp

※なお、来室される方は、教育相談員が学校訪問するなど不在の場合がありますので、事前にお電話にて確認のうえお出掛け下さい。

※啐啄（そったく）とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたき音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。